体重の重い患者を２人で腰掛便器に介助する場合は、車椅子の足台を立て、車椅子と便器をできるだけ密接させ、介助者は患者の両側に密着して、脇と大腿下部を持って支え、呼吸を合せてタイミングより移乗させると患者も不安や苦痛がなく、介助者の負担も少ない。

排便介助は、ベッド上でも、便所でもいづれの場合にしても介助者にかなりの負担がかかる。衣服の着脱、移乗、坐位姿勢の安定保持、安楽な方法と介助内容も多い。一人一人の患者に適した方法を考慮すると共に、介助動作に細心の注意を払い、より安全な方法を工夫しながら行うべきだと考える。

また今後の問題として、より負担の少ない方法を検討すると共に、ベッドや車椅子、トイレの構造などにも改善が必要であることを痛感している。

34) 抑　制　帯　の　工　夫

国立療養所刀根山病院
大久保　一　枝　　兼　子　文　代
栗　林　真理子　　谷　　昭　子
玉　置　公　子

筋力低下、変形の進行に伴ない体位の固定・保持が困難になる筋ジス患者にとって、抑制帯は不可欠なものであり、体位の固定という使用目的のみならず、転倒転落の予防等、安全を守る意味でも、また変形予防矯正のためにも重要なものである。

しかし実際に患者に使用する場合には、抑制帯という名前からも受けるように、抑圧感、圧迫感などを与えがちである。そこで、それらをできる限り取り除き、その使用目的に適合するよう配慮し、考案してみた。

具体的には、車椅子上での上半身・下肢の固定、ベッド上での坐位保持、排便時の体位固定等に必要なものを工夫した。

まず車椅子上での上半身の固定の目的では、最初布製で幅10㎝のひも状のもので前胸部を支え、車椅子の後方でしばっていた。結果、胸部の一部分に圧迫が加わりすぎるという欠点があった。

次に、比較的胸部広範囲に当たる胸当てに４本のひもを縫いつけた形のものを作ったが、これも圧迫感や疼痛があった。

そこで、下志津病院考案の抑制帯を参考にしたが、安定性が悪く患者は不安感を訴えた。次に、胸当ての上下にはスポンジを入れ、まん中には何も入れないものを作った。結果は、やはりまん中がしわになり上下に縮んでしまい、またスポンシはむし暑く、湿気がこもるという欠点があった。

そこで、スポンジ部分を原綿に変え胸立て全体に入れると、圧迫感はなく使い心地もよくなった。尚、抑制帯を車椅子に固定する際には、ひもを後のハンドルに一回巻きつけてからしばると、ゆる

まなく充分固定ができる。

その他、坐位での排便時の体位安定には、便器車を使用すれば車椅子上での体位固定と同様な方法で、抑制帯を利用する事ができる。

抑制帯の車椅子への固定の方法として、原病院の「マジックテープを利用した安全ベルトの安全度について」という研究結果を参考にしたが、マジックテープの使用は何分患者の恐怖感が大きい為、上半身の抑制帯には使用せず、ひもで結ぶ方法をとっている。

次に、車椅子上での下肢固定の抑制帯としては、しわになりにくいように毛布を芯にして厚みを持たせ、患者に合わせた幅にして、車椅子サイドのフレームに固定した。この場合、抑制帯を結ぶと、結びめの部分から全体的にしわができるので、結ぶ方法をやめてマジックテープで接着した。

*Bed*上での坐位保持の方法としては坐椅子の使用などが重要となり、補助的なものとして支持枕を当てたり抑制帯を使用するのが良いと考える。個人別に抑制帯と補助枕などの併用で安楽な姿勢保持をはかっている。

おわりに、現在まで抑制帯について検討を重ねてきた結果、抑制帯としての重要なポイントは、

① 安全であること。

② 苦痛が少ないこと。

③ むれないこと。であると考える。

今後は以上の点を考慮し、抑制されているという悪いイメージをできるだけ取り除くよう考えて行きたい。

検索用テキスト　OCR（光学的文字認識）ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

筋力低下、変形の進行に伴ない体位の固定・保持が困難になる筋ジス患者にとって、抑制帯は不可欠なものであり、体位の固定という使用目的のみならず、転倒転落の予防等、安全を守る意味でも、また変形予防矯正のためにも重要なものである。

しかし実際に患者に使用する場合には、抑制帯という名前からも受けるように、抑圧感、圧迫感などを与えがちである。そこで、それらをできる限り取り除き、その使用目的に適合するよう配慮し、考案してみた。